

# ひまわりからの

## メッセージ

39号

2014. 6. 10

西濃園域  
総達障い支援センター  
ひまわり

発行人：中野たみ子

ことばの奥にある

本当の気持ち



先週、飼犬のポポを予防注射に連れていきま  
した。以前にも書いたかもしれませんが、ポポは野良  
犬の子として生まれました。もっとも、母犬は首輪を  
つけていましたから、以前は飼犬だったようです。  
兄弟は全て保健所に連れて行かれて、一匹だけかく  
れていたとのことでした。友人に抱かれて吾が家に来  
た時には訴えかけるような、悲し気な目に惹かれて  
私達は、飼うことに決めたのでした。あれから、十一  
年が経ちましたが、堂々としている他家の犬に比べて  
何かにつけて怖がりです。長い棒がこわい、雨がこわい、

雷がこわいなど、何とも頼りなく、みすぼらしくさえ  
見えるのです。

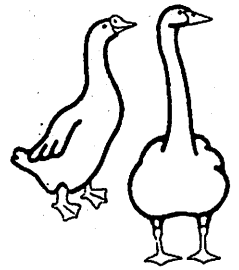
病院に着き、相変わらず怖がるポポの姿に「す  
みません。この子はみすぼらしく子で……」と口にした  
ところ、「お母さん、そんなこと言ってはいけません……」  
と叱られてしまいました。でも私は「ポポはみすぼら  
しっ子だけど世界一可愛いよ。大事な大事な子なん  
だよ。」と常々言っているのです。そんなに叱られるとは  
思ってもみませんでした。

その時、反論はしませんでした。私も人と話していて  
同じような反応をしてみようではないかと、ふと  
思ったのです。ことばは生きものです。口をついて出た  
ひとこと、奥にどんな思いが秘められているのかを知  
ることは、他者には難しいことです。私の知人の子は、  
友だちに「いいよ。」と言われたことで疎外されたと思  
い込んでしまいました。「ありがとう。いいよ。」だったう。  
又、受け取り方も違ったことでしょう。

表面上のことばで決めつけていないかなあ。相手の気持  
ちを受け止めようとしてるかなあ。反省の一日でした。

# 先生方の

## 様々な取り組み



先日、ある幼稚園を訪ねた時のこと、正面が何だか見なれた光景ではないのです。「あれっ、先生、何かいふもと違うんだけど……。」と聞いてみると、「気づかれませんでしたか、実は誕生表を廊下にはることにしたんです。正面がすっきりしてるでしよう。」

図と地の関係ということは聞かれたことはありませんか？背景と見るべきものの関係といったらう、お分かりいただけるでしょうか。雑然とした中から、自分が必要とする物だけを選び出して見ることが苦手な子には、背景にある刺激をなるべく少なくしてあげるということが大事なのです。

子どもたちが先生のまわりに集まって絵本を読んでもらうていましてが、皆、集中して見ていました。

市外の小学校に伺った時のこと、誰にでも分かりやすい授業をしようということで、最近ユニバーサルデザインとか、ユニバーサルな授業ということが広がりつつありますが、その学校は積極的に取り入れられています。どの学校にも見られる学級目標などは、黒板の上にはありません。先生の立ち位置の背景には、掲示物をはらないという試みがされていました。本当にすっきりした教室でした。

この二つの園、学校は、子どもたちの環境を整えることに主眼を置いていらっしやいましたが、参考になる所はありますよね。

ある学校の特別支援学級をたずねた時のことです。皆さんもご存知のように、学級の生徒さんは、一年生だからといって一年生の教科書通りに教えてもらうわけいきません。一人ひとりの教育的ニーズが違うわけですから、学級の生徒が七人いれば、七通りのカリキュラムが必要なのです。一人ひとりの生徒の発達や認知特性を知って、個別の目標を立てて実践を積

み重ねていかなければならぬわけですから、先生方の力量が試される所でもあると常々思っています。ところで、その学級では、生徒さんの各々の机の上にも、その一時間の間のスケジュールが貼ってありました。なるほど、予測できないと不安になる子にとっては、いちいち先生に「次は何するの？」と聞く必要はありませんし、担任の先生が他の生徒に個別で教えている時でも、自分のスケジュールにそって勉強を進めていくことができるわけです。

一人ひとりの目標があつて、その時間にやるべきことがわかつている。そして一時間が終わった時に予定の通りできたのかどうかを先生と見直してみる。担任の先生の意図がばきりと見える授業でした。

また、ある教室には、椅子に座った子どもの絵がはつてありません。姿勢を正しくするには、どのような座ればいいのかを示してある絵ですが、「ア、ア……」と見ていました。授業の中で注意をひきつけて話を聞いてほしいという場面になつてから登場しました。

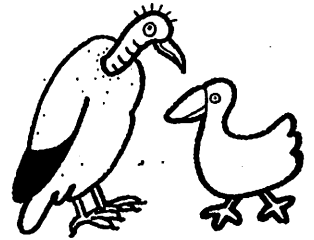
つまり、おつと貼つてあると、子どもたちにとっては、その絵は背景の一つになつてしまふという事です。なるほど、子どもたちは、その絵と「はい、聞きましよう」という先生の促しとで、自ら気づいて姿勢を直していったから、大声で注意しなくても良いわけです。効果的な使い方だと思ひました。

ある私立園にお邪魔した時のこと、給食が終つて掃除が始まりました。年長さんは廊下の雑中がけです。公立園で見かけることはありませんが、きれいな園舎です。おどらく子どもたちの体づくりのために始められたのではないかと思つて、たずねてみました。園長先生は、「まあ、そうですね」と笑つておられました。便利になつた社会や家庭で、今まで自然に身につけてきたことを、意図的に取り入れていくべき時期に来ているのだらうなあと思つたことでした。

今回は、努力されている先生方の姿を書いてみました。ありがたうございます。感謝です。

# 大人の側の

## 言語訓練を



言語聴覚士の大先輩で、多くの著作のある中山信子先生の本の中に、このことは見つけました。

言語訓練といえば、すぐ頭に浮かぶのは構音練習や呼吸訓練など、子どもたちのことですよ。やりによって大人に言語訓練なんて……と思われた方も多いのではないだろうか。

では、あなたは、自分がどんな声をしているか知っていますか？、どんな話し方をしていますか？、話す速さは、ゆっくりでしょうか？、早口でしょうか？、一方的に話してはいませんか？、相手に自分の話が理解されていますか？、自分の声は透る声ですか？、ことばを選んで話していますか？、声の高さは？、声の大きさは？、声の大きさを調節できますか？、

色々と言ってみましたが、私たちは普段はほとんど自分のことは見直すことはありません。だって大人ですもの、相手に通じると信じて疑いませんから……ところが実際には聞きまちがいをされたり、早口だと言われたり、「何て言った？」と聞き返されたりすることも多くあります。実は私たちは子どもたちの発音や話し方について色々気にして、言語訓練をすべきだと言う割に、自分のことは見直すことがなく、本当は、大人のことは見直す方が子どもたちのことには良い影響を与えると考えられるのです。

さて、まず、私たちは、ことばを選ぶ練習をしていますでしょうか？、走ってころんでしまった子どもに「なにやっているの……ちゃんと前を見えないからでしょ……」と叫んでいるお母さん、テレビが気になって食事が進まない子に「何やっているの……早く食べなさいよ……」と言っているお母さん、この時の「何やっているの……」は、「お母さんは怒っているのよ」という意味

ですよね。でももし転んだ子に、「大丈夫？」とか「痛かったね。」とか、「危いから歩いていこうね。」と言ったりどうでしょうか。テレビが気になっている子に「今、どうする時だった？」と気づかせたり、「先にがんばって食べようね。」とか、ことを選んで話すことで、子どもとの距離はぐっと縮まるのではないのでしょうか。

次に、子どもの気持ちに合わせることはかけの練習をしていますが、最近の子どもたちは、自分の要求を通そうとギョーッと泣き叫んだり、うまく表現できなくて直接行動に出てしまいます。そんな時に「うしろかかったんだね。」「うしろと言いたかったんだよね。」などと、本人の思いに合わせたことをほめかけるということは、とても大切なことです。自分の気持ちを代弁してくれて、理解しようとしてくれる。もうそれだけで子どもへの気持ちは満たされるのではないのでしょうか。「何か言いたいのか。言ってみよう。」と言われて、「うしろです。」なんて言える子は、そんなにはいな

いのです。大人に「言ってみよう。」と、ことを強要されると、益々言えなくなるのが子どもです。

話し方について、心がけているでしょうか？

特に低学年や障がいのある子にとって大人のことばの速さ、発音は、理解と大きくかわっています。子どもたちは、もともと早口の人には苦手です。何言われしているのかわからないからです。ある時とっても早口の先生に出逢いました。大人である私にも、先生のことばはうまく入って来ませんでした。まして子どもに正しく伝わるはずがないのです。ことばを、ゆっくり、はっきり話す練習は、お母さん方だけではなく、私たちのように子どもとかかわる仕事している者にとって大切なことです。

指示が通らないとか一方的なおしゃべりが多いとか、子どもたちの出来にくさをあげつらう前に自分のことばをふり返ってみることが大事です。子どもたちに分かるように、きちんと話しているかどうか自分のことばを客観的に見る練習も必要です。

つまり、子どもたちに対して、ことばを選んだり、子どもの気持ちに合わせてことばをかけたり、自分のことばも客観的に見たり、はっきりとゆっくりと聞きやすいように話し方を工夫したりすることとが、「大人の側の言語訓練」と言えます。

ある子が学校で「静かにしなさい。クサン。何やっているの？」、「物で遊ばない。クサン。」などと毎時間叱られたとしましょう。叱られたことによる不快を感じるのは、大脳辺縁系という所です。ここは本能的な快・不快を感じる所ですが、大脳皮質に比べて末端の器官です。ここで不快を感じてしまうと「その不快を何とかしろ！」という脳の命令のために、上部組織の学習につながっていかないので、このこと。「クサン!!」「いけません。」ということばが繰り返されるたびに不快ばかりが増幅されていくために、良い学習に結びつかず、結果として何度も同じ行動を起こしてしまおうと考えられているのです。否定語でなく肯定的フィードバック

をしていくことの大切さはよくわかっているのに、大人は何故か「クサン!!」「いけません!!」を連発してしまおう生き物のようです。

さて、あなたは、どんなことに心がけるといいかということに気づかれたでしょうか？、自分のことばの特徴に気づかれたでしょうか？、どの年令のお子さんに対しても、大人の側のことばをかけ一つで、関係は大きく変わってくると思います。

さあ、私も、もう一度自分のことばを客観的に見てみることにします。そして、子どもの気持ちを受け止めて、その気持ちを言語化してあげられるようにしていこうと思っております。私たちがお互いに気づき、指摘し合って変えていけたらいいですね。



◎スマイルブックについでアンケート、ありがとうございました。結果は次回にお知らせします。

◎七月例会は八月(火)です。  
人との距離感について考えましょう。